

東洋史の時空

——桑原隲蔵東洋史教科書についての一考察——

黄 東 蘭

はじめに

日本の学問や教育の歴史において、今日歴史の専門分野や大学の歴史科目として存在する東洋史は、日清戦争翌年の一八九五年に、大学に先だって中学校の歴史科目として成立した。その背景には、ヨーロッパに対抗しつつアジア大陸に勢力を拡大しようとする時代的要求があった。戦前の中学校教科としての東洋史において「東洋」はどのように捉えられ、東洋史は「東洋」に関するどのような「知」を提供したのだろうか。小稿では、一八九〇年代以降に出版された数多くの東洋史教科書のなかで回を重ねて改訂、改版され、三十年以上にわたって広く使用されていた桑原隲蔵の中学東洋史教科書を通してこれらの問題について考察したい。

桑原隲蔵（一八七一～一九三一）は白鳥庫吉と名を並ぶ明治期から昭和期にかけての日本の東洋史研究の代表的な人物である。桑原は一八九六年に東京帝国大学文科大学漢学科を卒業、長年京都帝国大学の文科大学東洋史学科教授をつとめ、内藤湖南とともに京都大学の東洋史研究の学問的基礎を築いた。桑原隲蔵の研究は当時日本の東洋史研究の主流である中国とその周辺地域との関係であり、宋元時代の中国で活躍したアラブ商人蒲寿庚とその一族の足跡を追った『蒲寿庚事蹟』は一九二三年に日本学士院賞を授与された¹⁾。

桑原隲蔵の東洋史教科書について、桑原と長年の同僚であり、桑原から学問の影響を受けたと自認する宮崎市定は²⁾、一九六八年に出版された『桑原隲蔵全集』の第四巻に付せられた解説において、桑原隲蔵の『中等東洋史』（大日本図書、一八九八年）、『初等東洋史』（大日本図書、一八九九年）、『中等教育東洋史教科書』（開成館、一九〇三年）の三冊の教科書、及び教師用参考書の成立、変遷、影響について説明している。宮崎市定は桑原隲蔵の『中等東洋史』と『東洋史教授資料』を「画期的な名著」と称賛し、桑原の『東洋史教科書』は一九〇三年に出版されてからおよそ三十年間「ほ

とんど独占的に中学校歴史教育に君臨」したと述べている³⁾。

桑原の教科書が東洋史教科書のなかで首位を占めた理由について、宮崎は、ほかの教科書に比べ、桑原の『中等東洋史』が一八九四年文部省発布の東洋史科目の教授要領の困難な要求をほぼ完全に満足させたことを挙げている⁴⁾。これに対して、江上波夫は、師の藤田豊八の『中等教科東洋史』『中等教科東洋小史』（いずれも桑原隲蔵の『中等東洋史』に先だって出版されたもの）と桑原隲蔵の『中等東洋史』との教科書先陣争いで軍配が桑原の教科書に上がったのは、当時日本の中等歴史教育界に絶大な支配力をもっていた東京高等師範学校（『中等東洋史』の校閲者である那珂通世は一八九四年に同校の教授に就任）のバックアップがあったからである、と指摘している⁵⁾。両者の意見はそれぞれの立場から事実の一側面を表していると思われるが、本稿の関心からすれば、改訂・改版の回数が多く、使用時期の長い桑原隲蔵の東洋史教科書は恰好の素材になるのである。

表一 桑原隲蔵東洋史教科書一覧

書名	出版社	初版年	総頁数
①『中等東洋史』	大日本図書	1898年	530
②『初等東洋史』	大日本図書	1899年	296
③『中等教育東洋史教科書』	開成館	1903年	174
④『女子教育東洋史教科書』	開成館	1912年	102
⑤『新制東洋歴史』	東京開成館	1925年	193
⑥『中学東洋史』	開成館	1931年	126

表一は各時期に出版された桑原隲蔵東洋史教科書のうちの代表的なものである。①は桑原がまだ大学院時代に執筆した桑原最初の著作である。上下二冊総ページ数五百を超える『中等東洋史』は、分量が多くて教材として使い難いため、出版してからわずか一年で②の『初等東洋史』に改版された。しかし、②～⑥は時代区分や編纂の体裁などにおいていずれも『中等東洋史』に基づいたものである⁶⁾。また、後述するように、①～③と異なっており、④と⑥はそれぞれ女子高等学校、実業学校用の教科書であったために、⑤は主に学生の自修のために編纂されたものである。桑原隲蔵はほぼ毎年のように教科書の内容を訂正し、時局の変化に合わせて内容を部分的に修正したため、①以外の教科書はいずれも複数のバージョンがある。これらの教科

書に合わせて、桑原は数多くの地図帳や教師用参考書も刊行したが、本稿ではこれらを考察の対象としない。ちなみに、桑原隲蔵の東洋史教科書及び地図帳、教師用参考書の一部は現在京都大学東洋史研究室桑原隲蔵文庫に所蔵されている。

以下、本稿では、まず中学校教育における東洋史成立の背景を踏まえたうえで、桑原東洋史教科書のなかで最も出版時期が早く、内容が豊富である『中等東洋史』における「東洋」の時間、空間の捉え方を分析する。最後に、『初等東洋史』から『中学東洋史』までの諸種の教科書を取り上げ、『中等東洋史』以降の「東洋」をめぐる時空表現や内容の変化について考察する。

一、「東洋史」の成立

江戸時代の歴史教育は、各藩が設立した武士の子弟を対象とした藩校における漢学教育の一環であった。その内容は主に『春秋左氏伝』『史記』『十八史略』など中国の史書を用いて中国の歴史を学び、『日本政記』『皇朝史略』『日本外史』など日本人が漢文で書いた史書を使って日本の歴史を学ぶことである。一方、寺子屋で学ぶ庶民の子供たちに対しては、中国や日本の歴史を通覧させるような教科書はなかった⁷⁾。

明治維新後、従来の藩校における漢文による中国史、日本史教育に加えて、欧米の歴史を教える西洋史が講じられるようになった。明治初期の歴史教育は、一八七二年（明治五年）文部省編纂の『史略』を通してその一端をみることができる。『史略』は「皇国」「支那」「西洋上」「西洋下」の四巻構成で、同年公布の小学校教則で歴史の教科書と指定されている。日本の歴史に関しては、神代に続いて神武天皇以降の歴代天皇史を簡略に述べている。中国の歴史に関しては、太古から三皇五帝を経て夏商周以降の歴史を王朝と皇帝の年号で記述している。「皇国」「支那」部分はいずれも分量が少なく、内容がきわめて簡略なものである。西洋の歴史は上古（アッシリアからギリシャ・ローマまで）と中古以下主に欧米主要国家の国王または皇帝の事蹟を記述している⁸⁾。「西洋」部分は記述が詳細で分量は「皇国」「支那」の合計の約二倍になる。『史略』に示された日本史、支那史、西洋史の三部構成はその後の教科書の基本的な体裁となり、その影響は一八八一年（明治十四年）小学校教則で小学校の歴史は日本史のみで、外国

史は中学校以降の教科とするまで続いた。

明治前半期の中学校歴史教育に関しては、小学校に続いて日本史を学ぶとともに、支那史、万国史が加わり、日本史・支那史・万国史の構成が一八八〇年代半ばころまでに続いた。支那史では、維新前の藩校での漢文教育の流れを受けて『十八史略』『元明清史略』など中国の歴史書が使われていた。万国史の場合は翻訳されたバーレーやスウィントンの教科書やこれらの翻訳教科書に基づいて日本人が編纂した『泰西史鑑』などが使われていた。一八七〇～一八八〇年代中学校歴史科目の年次配分をみると、第一年、日本史。第二年前期、日本史、後期、支那史。第三年前期、支那史、後期、万国史。第四年、万国史、となっている（授業時間はそれぞれ週二時間⁹⁾）。それぞれの科目で使われた教科書に関しては、たとえば福井中学校の場合、第一学年は『国史略』、第二学年の前期は『国史略』、後期は『十八史略』、第三学年は『元明史略』と『清史攬要』である。また、一八八四、八五年ころの千葉中学校の場合、第一学年は『明治国史略』、第二学年は『十八史略』『元明清史略』、第三学年は『元明清史略』『泰西史鑑』、第四学年は『泰西史鑑』『近世西史綱紀』『続西史綱紀』が使われていた¹⁰⁾。以上のように、『十八史略』を始めとする中国の歴史書は明治中期ころにもなお広く日本の中学校で使われていた。

『十八史略』は元代の曾先之が歴代の正史を抜粋して編纂した初学者のための書物であり、前出の文部省編『史略』の基礎となっている。前述のように、この本は江戸時代の藩校で広く教科書として使われたため、日本で数多くの版本が刊行された。一八八一年（明治十四年）木村文三郎が刊行した私家版『十八史略』を例にしてみれば、第一巻は太古から春秋戦国まで、第二巻は秦と西漢（前漢）、第三巻は東漢（後漢）から西晋まで、第四巻は東晋から隋まで、第五巻は唐代、第六巻は北宋、第七巻は南宋、となり、王朝と皇帝の廟号順で各王朝の歴史が記述されている¹¹⁾。

一八八八年（明治二十一年）、『十八史略』に基づいて編纂された漢文の『支那通史』が大日本図書で刊行された。著者は「東洋学の創設者」、当時東京師範学校幹事をつとめた那珂通世である。那珂通世（一八五一～一九〇八）は『元朝秘史』を翻訳し詳細な注釈を施して『成吉思汗実録』（大日本図書、一九〇七年）として刊行したモンゴル史の専門家で名を知られる。那珂は漢学的素養が高く、第一高等中学校兼高等師範学校教授をつとめ、東京帝国大学の講義も受け持った。桑原隲蔵は漢学科で那珂通世の学

問的薰陶を受けたことがあり、その『中等東洋史』は那珂が校閲したものである。『支那通史』（全四巻）の内容は『十八史略』と同様に南宋までだが、欧米の万国史教科書に倣って上世、中世、近世の時代区分を採用し、ヨーロッパの人種概念を用いている。那珂はその「総説」部分において中国の自然地理、民族に関する概説に続いて、中国史を上世、中世、近世の三期に分ける理由についても説明している。この「総説」部分が一八九〇年代に出版された多くの東洋史教科書に影響を与えることとなる。

一方、中学校の万国史科目の教科書は、欧米人が欧米の子供たちのために書いた欧米中心の歴史である。たとえば、当時教科書として広く使われていた一八八六年（明治十九年）出版の『須因頓氏万国史』（全五巻、原著は一八七四年にイギリスで出版された）の第一巻「古代東洋諸国」で取り上げられる「東洋」の国々は、エジプト、アッシリアとバビロン、ヘブライ、フェニキア、インドとペルシャであり、アジア東部の国家や民族は登場していない¹²⁾。つまり、当時の万国史は欧米世界およびヨーロッパ文明のルーツとされるエジプト、西アジアを中心とした歴史であった。

当時日本の中学校は一八八六年（明治十九年）の「中学校令」に従って、尋常中学校（各府県の所管、修業年限五年）と高等中学校（文部大臣の所管、修業年限二年）の二級に分かれ、尋常中学校は農業、工業、商業などの課程を設けるなど卒業後実生活に入る者のための教育に重きをおき、高等中学校は大学に進学するための予備教育の機構と位置づけられていた¹³⁾。この「中学校令」に基づいて定められた「尋常中学校ノ学科及其程度」によれば、尋常中学校の修業年限は四年から五年と改められ、授業科目は倫理、国語及漢文、地理、歴史などの十四科目であり、歴史は「日本及外国歴史」となっている¹⁴⁾。これをもって、尋常中学校の歴史教科は日本史と外国史の二部構成となったのである。しかし、「中学校令」が発布された後も、中学校の歴史教育は依然として従来の日本史、支那史、万国史の三部構成であった。これは当時使われた教科書からみることができる。たとえば、一八八八年（明治二十一年）の群馬県尋常中学校歴史科の場合、第一学年の教科書は『皇朝史略』『十八史略』、第二学年は『元明清史略』『十八史略』、第三学年は『スウキトン氏万国史』、第四、第五学年は『チャムバー氏近世史』が教科書として使われていた¹⁵⁾。

一八九四年（明治二十七年）、高等師範学校の校長嘉納治五郎は、同校の教授を含む教育関係者、大学教授を召集して中等学校の教育に関する意

見を集めた。その席上で、当時第一高等中学校兼高等師範学校教授だった那珂通世は、外国歴史を西洋歴史・東洋歴史の二つに分けるべきと提議した。その理由として、中国をはじめ、朝鮮、インドその他日本と歴史的に関係が深い東洋諸国の歴史を編成し「世界史の一半」とすべきである、ということが挙げられていた。那珂の提案は列席者の賛同を得て、翌年の一八九五年から東洋史は西洋史と並んで尋常中学校の外国史科目として成立することになった¹⁶⁾。

ところで、東洋史科目が成立した際に、「東洋」の地理概念や東洋史の範囲については必ずしも明確な定義がなかった。当時文部省に出された意見書によれば、「東洋歴史は支那を中心として東洋諸国の治乱興亡の大勢を説くものにして西洋歴史と相対して世界歴史の一半をなすもの」とあり、東洋史の内容については「東洋歴史を授くるには我国と東洋諸国と古より互に相及ぼせる影響如何に注意し、又東洋諸国の西洋諸国に対する関係を説明すべし」と述べられ、「是まで支那歴史は歴代の興亡のみを主として人種の盛衰消長を説かざれども、東洋歴史にては東洋諸国の興亡のみならず支那種、突厥種、女真種、蒙古種等の盛衰消長に説き及ぼすべし」と述べられている¹⁷⁾。ここで、「東洋」は「西洋」と対比する意味で使われ、「東洋史」は「西洋史」以外の地域の歴史を範囲とし、中国を中心とする東洋諸国の治乱興亡の大勢を説くものとされている。「東洋諸国」は自明の概念とされ、そのなかに日本が含まれるかどうかは明確ではない。

東洋史が西洋史と並んで尋常中学校の外国史科目として成立する背景には、もっぱら中国歴史上の王朝盛衰の歴史を内容とする支那史は、明治維新後アジア大陸に勢力を伸ばそうとする当時日本の情勢に対応することはできなかったことがある。アヘン戦争で清朝がイギリスに敗北して以来、中国の周辺諸国が次々とヨーロッパの植民地になった。清朝が弱体化するなかで、明治政府は清朝と薩摩の両方に入貢していた琉球王国を滅ぼして琉球を領土化した後、台湾出兵、江華島事件などの軍事行動を通じて東アジアに勢力を伸ばした。一八八〇年代から朝鮮をめぐる清朝との十年にわたる対立の末、日本はついに一八九四年の日清戦争で清朝に勝利し、最初の海外植民地として台湾を獲得し、東アジアを舞台にヨーロッパの大国ロシアと対抗することになった。アジア大陸への勢力拡大に伴い、日本が中国に代わって東洋の覇主となり、西洋の欧米勢力に対抗していく意識が芽生えた。こうしたなかで、中国を文化の手本とする従来の支那史の代わ

りに、「東洋」に対する新たな「知」の関心を満たす東洋史が必要とされたのである。

桑原隲蔵の『中等東洋史』に寄せた序文のなかで、那珂通世は次のように述べている。「欧州の盛衰のみを叙述して、世界史又は万国史と名づくることの不都合なるは、事新しく言ふまでもなし。世界の開化は、固より欧州人の専有に非ず。東洋諸国、殊に皇国支那印度の如き、人類社会発達の上に、風化を及ぼせることの広大なるは、復疑ふべからず¹⁸⁾。ここで、那珂はヨーロッパ人のみが人類歴史に貢献のある人種とする西洋中心の歴史観を批判し、「西洋史」への対抗意識から「東洋史」を樹立する必要性を強調しているのである。

「東洋史」が中学校の歴史教科として成立したもう一つの背景は、中国の儒学の伝統を受け継いだ江戸時代以来の漢学に取って代わり、明治以降ヨーロッパ東洋学の影響が広がったことである。ヨーロッパ近代歴史学の訓練を受け、ヨーロッパ東洋学の方法を積極的に摂取した日本の若い研究者たちは、中国中原王朝の歴史よりも中国と周辺諸民族との関係の歴史に関心を傾けるようになった。彼らはヨーロッパ東洋学の方法を学びながら、これに対抗しうる日本の東洋学を確立しようとした¹⁹⁾。那珂通世はモンゴル史の専門家であり、その学問的薫陶を受けた桑原隲蔵も、後に東西交渉史の研究で日本の東洋史研究の一翼を担うことになった。

二、桑原隲蔵の『中等東洋史』について

1. 『中等東洋史』の時代区分

正史である中国歴代王朝の歴史を記録した二十四史において、過去の時間は王朝の興廃によって区切られている。そこで、「そもそも天下の大勢は、合すること久しければ必ず分かれ、分かれること久しければ必ず合す」という『三国志演義』冒頭の文句が示しているように、王朝の一治一乱によって過去は繰り返し循環するものとして描かれている。

これに対して、近代ヨーロッパの歴史学においては、過去の時間は古代から中世を経て近代に続く直線的なものとして捉えられている。その根底には人類の歴史は野蛮から文明へ進歩するという歴史観がある。「万国史」と呼ばれる欧米の世界史教科書の影響を受けて、一八八〇年代から一八九〇年代にかけて、日本人が編纂した世界史教科書はいずれも上古、中

古、近世、あるいは上世、中世、近世の時代区分を採用している²⁰⁾。前述の那珂通世の『支那通史』も中国の長大な歴史を古代、中世、近世に分けて叙述している。

表二 那珂通世『支那通史』の時代区分

上世史	太古～六国の滅亡
中世史	秦漢～金宋
近世史	元以降(未刊)

那珂は秦による統一以前の歴史を儒家の經典において政治の理想とされる上古の三代(「古三代」)とし、秦の始皇帝以降の歴史については、漢、唐、宋の三つの王朝を「後三代」、その後の元、明、清を「近世の三代」とし、それぞれ上世、中世、近世としている。那珂は「(中国の) 歴代治乱分合の概略を述べ、初学の者が我が国の隣国の開化の概要を知ること願う」と述べている²¹⁾。宮崎市定は、那珂の時代区分は、一治一乱の周期を重視する立場によるものであったと指摘している²²⁾。これに対して、表三に見るように、桑原隲蔵の『中等東洋史』の時代区分の基準は那珂のそれと異なっている。

表三 桑原隲蔵『中等東洋史』の時代区分

上古期	漢族膨張時代	太古～秦の統一
中古期	漢族優勢時代	秦漢～唐末
近古期	蒙古族最盛時代	契丹～明末
近世期	歐人東漸時代	清初～日清戦争

「漢族膨張時代」「漢族優勢時代」「蒙古族最盛時代」「歐人東漸時代」という表現が示しているように、桑原隲蔵の『中等東洋史』は中国歴史上漢民族と周辺諸民族との争い、さらにヨーロッパ人の勢力がアジアに進出しからアジアとヨーロッパの争いに焦点を当てて、民族／人種間の勢力消長に歴史の流れを把握しようとしている。同書の特色について、桑原は『中等東洋史』冒頭の「中等東洋史辨言十則」の第四条に、「大は年代の区劃、人種の分類より、小は塞外諸国の興亡に至るまで、其体裁と材料とに於て、本書が先輩諸士の著書と、其面目を異にする所極めて多し。敢異を好むに

あらず。自家の所信に本づきて然るなり」と、『中等東洋史』の創見を強調している²³⁾。しかし、民族／人種間の勢力消長を東洋史の主流と見なす歴史観は、桑原の独創ではなかった。『中等東洋史』に先だって出版された藤田豊八の『中等教科東洋史』（文学社、一八九六年）とその改訂版である『中等教科東洋小史』（文学社、一八九七年）は、すでに『中等東洋史』とほぼ同じ基準で時代区分をしているのである。

藤田豊八（一八六九～一九二八）は東京帝国大学文科大学漢学科で桑原より一年先輩で、長年日中両国で教育活動に携わり、早稲田大学教授を経て東京帝国大学東洋史学科教授となり、台北帝国大学文政学部長在任中に病死した²⁴⁾。藤田は一八九七年二十九才で中国に渡り、まもなく羅振玉が上海で創設した東文学社の教育に携わった。その時彼は桑原の『中等東洋史』の漢訳を薦め²⁵⁾、それが一八九九年東文学社で刊行された桑原隲蔵著・樊炳清訳『東洋史要』であった。実藤恵秀によれば、これは中国人が翻訳した最初の日本書である²⁶⁾。以降、『中等東洋史』の複数の中国語版本が刊行され、清末・民国初期の中国でも教科書として使われた²⁷⁾。以下は藤田が編纂した二冊の東洋史教科書の目次である。

①藤田豊八『中等教科 東洋史』（一八九六年）の時代区分

上世（秦統一以前）、中世（〈上〉秦～魏晋南北朝、〈中〉隋唐、〈下〉五代及び宋代）、近世（元明清）

②藤田豊八『中等教科 東洋小史』（一八九七年）の時代区分

第一篇 漢種の建国（太古～秦による統一）、第二篇 漢種の膨張（秦漢）
 第三篇 漢種の勢一時屈す、諸種の跋扈（三国～隋）、第四篇 漢種の最盛時期（唐）、第五篇 漢種の衰運、蒙古種通古斯種の興起（五代～宋の滅亡）、第六篇 蒙古種の盛運及び其の末葉（元）、第七篇 漢種明朝を建つ、通古斯種の盛運（明清）、第八篇 欧勢の東漸（アヘン戦争～日清戦争）

表四は①と②を合わせた藤田豊八の時代区分である。

表四 藤田豊八の時代区分

上世	漢種建国と膨張	太古～秦による中国統一
中世	漢種一時屈すから優勢へ	秦漢～宋代
近世	蒙古種族、通古斯種の盛運、欧勢の東漸	元明清

これを表二的那珂通世の時代区分と比較すると、藤田豊八の東洋史教科

書は、上世、中世、近世の三期区分をしている点、中世を秦から宋までの長い時期に設定した点においては那珂通世『支那通史』と同じであるが、時代区分の基準に関しては『支那通史』と異なっている。一方、藤田の時代区分を表三の桑原隲蔵の時代区分と比べると、「漢族」と「漢種」、「最盛」と「盛運」、「欧人」と「欧勢」のような用語の相違はあるものの、民族／人種勢力の強弱を東洋史の分水嶺とする点において、両書はほぼ共通していることが明らかである。藤田は、『中等教科東洋小史』冒頭の「総説」部分において、歴史を「殊別史」と「一般史」に分け、前者を一国の国民の歴史、後者を複数の国家の関係の歴史としたうえで、後者の範疇に属する「東洋史」は、「東方亜細亜に興敗せし国民の一般」の歴史であると述べている²⁸⁾。ここには、歴史の主役は皇帝ではなく「国民」＝民族／人種であるという彼の歴史観が明確に表されている。ちなみに、藤田と桑原の人種／民族分類はいずれもヨーロッパから伝来した学説に基づくものであり、藤田の言う「漢種」と桑原の言う「漢族」はいずれも漢民族を指しているが、両者の分類法は異なっている。藤田は東アジアの人種を蒙古種とし、さらにこれを漢種、苗種、^{ツングース}通古斯種、^{トルコ}都爾古種、^{チベット}蒙古種、^{チベット}凶伯特種、韓種の七つに分類している²⁹⁾。一方、桑原は、東アジアの人種を「亜細亜人種＝黄色人種」とし、これを西伯利人種と支那人種の二つに分けて、前者を日本族、通古斯族、蒙古族と土耳其族、後者を漢族、凶伯特族、交趾支那族にそれぞれ分類している³⁰⁾。なお、後述のように、桑原は『中等東洋史』の改訂版である『初等東洋史』では、「漢族」は「漢種」、「蒙古族」は「蒙古種」にそれぞれ改められている。

2. 『中等東洋史』における「東洋」

「東洋」に対応する orient という語は「太陽の昇る地」「日の出」「東の空」を意味し、the Orient はヨーロッパからみて地中海の東方にあるアジア諸国を指す。これに対して「西洋」に対応する occident という語は「太陽の沈む地」「西の空」を意味し、the Occident はヨーロッパ諸国を指す。中国語には古くから「東洋」という言葉があるが、多くの場合それは日本を指す語である。魏源の『海国図志』では太平洋を「大東洋」と称し、インド洋と大西洋をそれぞれ「小西洋」、「大西洋」と呼んでいる³¹⁾。

宮崎市定は、今日のように世界を大まかに東洋・西洋と呼ぶのは明治時代の日本人の発明であると指摘している³²⁾。窪寺紘一によれば、一八七四

年（明治七年）に刊行された太田勘右衛門編輯の『新刻書目便覧』に岡本伴治の『東洋史略』二巻が挙げられている。これは「東洋史」という語の初出と見られる³³⁾。

前述のように、「東洋史」が一八九五年に中学校歴史の科目として成立する際に、「東洋」の地理概念や「東洋史」の対象とする地域に関しては明確な定義がなされていない。私見の限り、東洋史科目成立後最初に出版された東洋史教科書は一八九五年（明治二十八年）二月東京の八尾書店が刊行した児島献吉郎の『東洋史綱』である。このなかで、著者は中国とインドを二つの中心とし、東は朝鮮、ベトナムから、南はインド、西はアッシリア・バビロンまでのアジア全体を包含する「東洋史」を構成している³⁴⁾。そして、同年九月富山房刊行の坪井九馬三校閲・宮本正貫編『東洋歴史』の序文において、坪井九馬三は東洋史の範囲について次のように述べている。「漢史ヲ以テ中央部トシ、西域漠北松漠高麗半島諸国ノ歴史事実ニシテ事漢史ニ関連スルモノニ限り取りテ以テ周圍部トシ、漢史ヲ科学的ニ叙述スルヲ以テ其目的トス」³⁵⁾。すなわち、中国史を東洋史の中心部分とし、西域から朝鮮半島までの周辺地域を含むが、中央アジア、アラビア半島は東洋史の範囲には含まれていない。

藤田豊八は前出の『中等教科東洋小史』のなかで、「元來東洋とは西洋に対する名称にして亜細亜全洲を指す。然れども亜細亜全洲に興敗せし国民は史上皆互に關係を有せりと謂ふべからず。こゝに東洋といへるは東方亜細亜に興敗せし国民の一般のみ。……東洋史は支那を中心とし、史上之に關係を有せる国民を併せ、これが一般史を考究するものとす」と述べている³⁶⁾。すなわち、東洋史は中国を中心とする「東方亜細亜」の国民の歴史である。しかし、「東方亜細亜」の地理概念については明確な定義をしていない。

これに対して、桑原の『中等東洋史』は「東洋」及び「東洋史」に明確な定義を与えている。「東洋史」が対象とする地理空間について、桑原は『中等東洋史』の「総論」部分で次のように説明している。「東洋史とは、主として東方亜細亜における民族の盛衰、邦国の興亡を明にする。一般歴史にして、西洋史と相並んで世界史の一半を構成する者」である³⁷⁾。さらに、彼はアジア大陸を東方、南方、中央、西方、北方アジアの五つの部分に分けて、それぞれの位置や山川の形勢を説明している。そのうち「東方亜細亜」については、「南は喜馬拉耶ヒマラヤ、西は葱嶺（パミール高原）、北は阿爾泰アルタイ

の三大山脈によりて圍繞せられたる一帯の土地をいふ。支那及朝鮮之に属す。「東方亜細亜より朝鮮を除けば、其余地は悉く支那帝国に属す」と述べている³⁸⁾。つまり、「東洋」は「東方亜細亜」を意味する地理概念であり、具体的に中国と朝鮮を指す。東洋史は中国と朝鮮の歴史上の諸民族の盛衰や国家の興亡を講ずるものである。

では、『中等東洋史』の執筆にあたって、桑原隲蔵は日本史と東洋史の関係をどのように捉えていたのだろうか。これについて、宮崎市定は前出の『桑原隲蔵全集』第四巻に付せられた解説において、「著者(桑原隲蔵)の意図する東洋史は、当然日本を含むべき筈のものであった。ただ『中等東洋史』は中等教科書であるが故に、日本史の部分を省略したにすぎない。当時の中学校においては別に日本史の学課が設けられ、しかもそれは必修であったから、東洋史の中に再び日本史を繰返すのは全く無用だったわけである」と述べ³⁹⁾、『中等東洋史』が日本史を含まないのは教育的観点からの配慮であったと指摘している。

確かに、桑原隲蔵も『中等東洋史』冒頭の「辨言」第八条に、「我国に於ける事変は、別に国史の存するあれば、斯には重複を避けて、他国と大関係ある事変の外は、多く省略に従ふ」としており⁴⁰⁾、当時の中学校の歴史教科の科目設置に鑑みて日本史の部分を避けていると述べている。しかし、前述の「東洋」や「東方亜細亜」に関する桑原隲蔵の地理概念に立ち戻って考えれば、教育的配慮以前に、東洋史に日本史を含まない前提がすでに存在しているように思える。なぜなら、桑原にとって「東方亜細亜」は中国と朝鮮であって、「東洋史」は「東方亜細亜」における民族の盛衰、邦国の興亡に関する歴史であるため、桑原が当初から日本史を東洋史の中に含むべきであるという考え方を持っていたかどうかは疑問である。「東洋史は当然日本を含むべき筈」という宮崎市定のコメントには、あるいは長年東洋史研究に従事した宮崎市定自身の、東洋史・日本史の分離という明治以降日本の学問的現状への反省と批判が込められているのかもしれない。

ところで、『中等東洋史』では、中国の正史に基づいた歴史上の王朝交替が大きなウエートを占めているが、中原の王朝と周辺諸民族との関係にも一定の紙幅を割いている。とりわけヨーロッパの書物を参考にインド及び中央アジアに関する知識が盛り込まれている。『中等東洋史』が対象とする「東洋」の地理空間は、中国、朝鮮をはるかに越えてアジア全域に広

がるものである。桑原はこの東洋という広大な地域を民族／人種の競争の場として捉え、東洋史を時代順に次の四つの空間に繰り広げられた異なる民族／人種の競争の歴史として描いている。第一、「漢族膨張時代」＝上古期。これは西方から来た漢族が苗族を圧迫して、現在の中国北部の地域を占拠し、三皇、五帝、三代を経て秦の統一までに次第に勢力を拡大する時期である。「東洋」は漢族が居住する中原と「夷狄」とされる周辺の民族との対抗する場である。第二、「漢族優勢時代」＝中古期。この時期、漢族は秦の統一を経て、漢代には漢族の勢力が匈奴を始めとする北方の諸民族を制し、唐代にはその版図が中央アジアにまで広がる空前の大帝国を築いた。これにともない、「東洋」の範囲も、東は朝鮮、日本、南はインドシナ半島、西には中央アジアまでに広がっている。第三、「蒙古族最盛時代」＝近古期。この時期、モンゴル族は漢族を制圧して元朝を建てて、中国やその周辺地域を支配下に置くだけではなく、中央アジア、西アジア、北アジア、さらにヨーロッパの一部を含む広大な地域で一大帝国を築いた。「東洋」はついにアジア全域とヨーロッパの一部にまで広がっている。第四、「欧人東漸時代」＝近世期。この時期、キリスト教の宣教師を始め、ヨーロッパ人の勢力が東アジア、南アジア、西アジア、インドシナ半島にまで広がり、この広大な地域を舞台とする大競争が始まった。これに従って、「東洋」の範囲も東アジア、南アジア、中央アジアに広がっている。

このような広大な地理空間を対象とする桑原の教科書について、那珂通世は『中等東洋史』の序文において、次のように述べている⁴¹⁾。

近来東洋史の書、世に行はるゝ者頗る多けれども、皆支那の盛衰のみを詳にして塞外の事変を略し、殊に東西両洋の連鎖なる、中央亜細亜の興亡の如きは、全く省略に従ふが故に、亜細亜古今の大勢を考ふるに於ては、不十分なるとを免れず。予常に之を憾とせり。此頃文学士桑原隲蔵君中等東洋史を著はして予に示せり。予受けて之を読むに、資料を東西に取りて博引旁搜し、善く東洋民族の盛衰消長、列国の治乱興亡を述べ、簡にして要を得たり。

ここで、那珂は、それまでの東洋史教科書が東洋史と称しながらもっぱら中国の王朝交替を詳細に述べ、漢族と周辺民族との関係、とりわけ中央アジアに関する記述は皆無であるのに対して、桑原隲蔵の『中等東洋史』は塞外（万里の長城以外の地域）の歴史、とりわけ中央アジアの歴史まで視野に入れた点を高く評価している。

しかし、桑原隲蔵の『中等東洋史』とそれに先だって出版された東洋史教科書とを比較すれば、那珂のこの指摘に偏りがあると言わざるを得ない。まず、「東洋」の対象地域について、たとえば、前出の児島献吉郎の『東洋史綱』の場合、第一章の総論部分に続いて、第二章以降は中国、朝鮮、ベトナム、インド、アッシリア・バビロンの歴史を記述している。そのうちインドに関しては、太古から仏教の創立を経てイスラム勢力に征服されるまでの歴史（九ページ）、中央アジア、西アジアに関しては、アッシリア建国から両河文明の隆盛を経て、アレクサンドロス大王によるペルシャ征服までの歴史（本文七ページと地図二枚）をそれぞれ記述している。また、藤田豊八『中等教科東洋史』（文学社、一八九六年）は「匈奴」、「両越」、「西域諸国」の三章を設けて、漢の武帝時代に中国の勢力が周辺に広がった歴史的経緯を詳細に述べており、漢代の対外関係に関しては、桑原隲蔵『中等東洋史』とほぼ同等の紙幅を割いている。

ただし、中国以外の地域に関する記述の内容について言えば、桑原隲蔵『中等東洋史』の記述は同時代の東洋史教科書より詳細であることは注目に値する。たとえば、インドに関連する内容について、藤田豊八『中等教科東洋史』は「印度——仏教の東漸」という章を設けて、インドの古代文明、カースト制度、仏教の起源・流派および中国への伝来、ペルシャやギリシャのインド征服について述べている（六ページ）。これに対して、桑原の『中等東洋史』は「仏教の東漸」と題した単元に「釈迦以前に於ける印度の状況」「釈迦の出世と阿輸迦王の時代と」「大月氏の勃興と仏教の東漸と」「前漢と西域諸国との関係」の四章を設けて詳細に紹介している。その分量は藤田豊八『中等教科東洋史』の三倍を超える二十ページに及ぶ。

また、イスラム教やアラビア半島に関する記述については、藤田豊八『中等教科東洋史』の「外教の東流」と題した章では、キリスト教、マニ教、イスラム教が中央アジアから中国に広がった経緯を述べ、イスラム教の勢力がアラビア半島からパミール高原までに広がったことや、中国におけるイスラム教の隆盛、アラブ商人の活動に言及している（二ページあまり）。松島剛『中学東洋歴史』（一八九七年）は「西亜の形勢」と題した章を設け、モハメッドによるイスラム教創立、その後継者たちによるイスラム勢力の拡大、バグダッドを中心とした東西貿易の隆盛について述べている（二ページ弱）。これに対して、桑原隲蔵『中等東洋史』では、「唐の外国経略」という単元に九章四十七ページを割いて、唐と朝鮮半島、突厥、チベット、

インド、および中央アジアとの関係、唐の属地管理法、唐代における東西貿易、諸宗教の伝来について詳細に述べている。桑原は、マホメットによるイスラム教の創立、イスラム教勢力による中央アジア、西アジアの征服、そして唐代の東西貿易について、陸路、海路に分けて記述し、外国の諸宗教の伝来についてはゾロアスター教、マニ教、景教（ネストリウス派）、イスラム教、仏教の五つに分けて詳細に述べている。

以上のように、桑原隲蔵の『中等東洋史』を含む一八九〇年代の東洋史教科書は、もっぱら中国史上の王朝盛衰の歴史を叙述する従来の中国史関係の書物と異なって、中国史を東洋史の中心に据えながらも、中国とその周辺の諸民族、諸地域との関係を歴史叙実の中心に据えている。そうすることによって、漢民族を中心とする中国の歴史だけではなく、中国の周辺地域、さらにはインドや中央アジア、西アジアまでの広大な地域に繰り広げられた諸民族、諸文化間の交流の歴史が「東洋史」の「知」の空間に含まれるようになったのである。なかでも、桑原隲蔵『中等東洋史』は、それまでの東洋史教科書に比べて、とりわけインドや中央アジアに関する膨大な量の知識が含まれていることは指摘しておきたい。

三、『初等東洋史』から『中学東洋史』へ

すでに述べたように、桑原の『中等東洋史』は出版された後幾度も改訂・改版された。以下では、『中等東洋史』の最初の改訂版である『初等東洋史』と桑原が生前編纂した最後の教科書である『中学東洋史』を含む五種類の教科書を取り上げ、これらの教科書における「東洋」をめぐる時空表現や記述内容の変化について検討したい。

(1)『初等東洋史』（大日本図書、一八九九年初版）は『中等東洋史』の翌年に出版されたものであり、前著の内容に一部修正を加えたうえで分量を約半分まで減らしている。『初等東洋史』で『中等東洋史』の「総説」の部分が省略されているため、アジア各部分の地理的特徴や人種／民族についての説明が消え、時代区分の理由についての説明も省かれている。『初等東洋史』以降の桑原隲蔵東洋史教科書はいずれも「総説」部分を設けていない。『初等東洋史』はその後の桑原隲蔵教科書に比べて、最も忠実に『中等東洋史』の内容を反映している。

(2)『中等教育東洋史教科書』（東京開成館、一九〇三年初版）は桑原隲

蔵東洋史教科書のなかで最も使用時期が長く、影響の大きいものである。この教科書では記述がすべて箇条書きになり、平易簡明な文体に変わり、逸話や民族の風俗に関する内容が増え、挿絵や写真が多く掲載されている。また、学生が復習しやすいよう時代ごとに摘要と年表が付せられている⁴²⁾。

(3)東京開成館一九二五年刊行の『新制東洋歴史』は自修者の学習用のために編纂されたものである。『中等教育東洋史教科書』に比べ、『新制東洋歴史』は記述が幾分詳細になっており、分量も二十ページほど多い。特に注目すべきは、『新制東洋歴史』では、欄外に日本の歴史上の主な出来事に関する記述が付せられている点である。

(4)一九三一年刊行の『中学東洋史』(東京開成館)は桑原隲蔵が編纂した最後の教科書とみられる⁴³⁾。この教科書は一般の中学校と異なって実業教育を趣旨とする学校で使われるもので、書名の下に「新制甲要日用」と記されている⁴⁴⁾。この教科書は『中等教育東洋史教科書』の特徴を受け継いで、写真や図画を多用し、時代ごとに摘要及び年表を付けている。

(5)東京開成館一九一二年刊行の『女子教育東洋史教科書』は、尋常中学校のレベルに相当する高等女学校で使用される東洋史教科書である。一八九一年(明治二十四年)の女子中等教育の規程によれば、高等女学校は制度上男子の尋常中学校の一種として扱われる⁴⁵⁾。このことから、『女子教育東洋史教科書』は男子の尋常中学校で使われた『中等教育東洋史教科書』に相当するレベルのものと考えられる。男子校で使われる『中等教育東洋史教科書』に比べて、『女子教育東洋史教科書』は時代区分や内容はほぼ同じであり、時代ごとに摘要及び年表が付けられているが、写真や図画を多用し、記述はいっそう簡略になっている。

では、一八九八年の『中等東洋史』に比べて、『初等東洋史』以降の桑原隲蔵東洋史教科書の内容はどのような特徴があるのだろうか。まず、時代区分について見てみよう。次頁の表五は『初等東洋史』以降の桑原隲蔵東洋史教科書の時代区分である。この表が示しているように、『初等東洋史』は『中等東洋史』の「漢族」「蒙古族」をそれぞれ「漢人種」「蒙古人種」に変えただけで、時代区分は『中等東洋史』のそれと同じである。しかし、『中等教育東洋史教科書』以降の教科書から、上古、中古、近古、近世の各時代の特徴を表す「漢人種膨張時代」「漢人種優勢時代」「蒙古人種最盛時代」「歐人東漸時代」という表現が消えている。これによって、教科書

東洋史の時空

表五 桑原隲蔵『初等東洋史』などの時代区分

『初等東洋史』	上古期	漢人種膨張時代	太古～秦の統一
	中古期	漢人種優勢時代	秦漢～唐末
	近古期	蒙古人種最盛時代	契丹～明末
	近世期	欧人東漸時代	清初～日清戦争
『中等教育東洋史教科書』	上古期		太古～周末
	中古期		秦～唐末
	近古期		契丹～明末
	近世期		清初～日清戦後の東亞
『女子教育東洋史』	上古期		太古～周末
	中古期		秦～唐末
	近古期		契丹～明末
	近世期		清初～英、露、仏のアジア侵略
	現代期		日清戦争～中華民国
『新制東洋歴史』	上古期		太古～周末
	中古期		秦～唐末
	近古期		契丹～明末、……西力の東漸
	近世期		清初～英、露、仏のアジア侵略
	現代期		日清戦争～中華民国
『中学東洋史』	上古期		太古～周末
	中古期		秦～唐末
	近古期		北宋～西力の東漸
	近世期		清初～英、露、仏のアジア侵略
	現代期		日清戦争～中華民国

の時代区分の根拠が示されず、上古、中古、近古、近世などの時代区分そのものの意味も薄れた。

各改訂版の時代区分における最も重要な変化は「近代期」の後に「現代期」がもうけられたことである。大正期以降に出版された『女子教育東洋史』、『新制東洋歴史』と『中学東洋史』では、いずれも「現代期」が設けられ、それまでに近世期の最後で述べられる日清戦争が現代期の起点として位置づけられるようになった。これらの教科書では、上古から近世までの時代区分は、主に中国史上における漢民族と他の民族との競争がもたらした王朝交替を基準としている。これに対して、現代期では、日本が清朝

に勝利した日清戦争は東洋史上の新たな時代の幕開けとして位置づけられており、日本が中国に代わって「東洋の盟主」になったことが強調されるのである。

そして、『初等東洋史』以降の桑原東洋史教科書のもう一つの特徴は内容の減少と記述の平易化である。表一「桑原隲蔵東洋史教科書一覧」が示したように、『初等東洋史』以降の一連の改訂により、『女子教育東洋史』と『中学東洋史』の分量はそれぞれ『中等東洋史』の約五分の一と四分の一までに減少した。最初の『中等東洋史』に比べて、『初等東洋史』以降の教科書は、記述が著しく簡略化され、項目ごとに削除されたものも少なくない。たとえば、全体的に桑原東洋史教科書は中国と周辺諸民族との関係を重視するが、「厚今薄古」の方針に従って、『中等東洋史』にある上古期の「漢族と諸外族との関係及周代に於ける戎狄の跋扈」と題した章は、翌年の『初等東洋史』以降の教科書では姿を消した。また、『中等東洋史』で九章（四十七ページ）を占める「唐の外国経略」に関する記述は、『初等東洋史』では二章（二十二ページ）までに減少し、一九〇三年の『中等教育東洋史教科書』においては二章（九ページ、四枚の図画と写真を含む）となり、『新制東洋歴史』では一章（五ページ、図画と地図を一枚ずつ含む）、最後の『中学東洋史』ではわずか一章のうちの二項目（二ページ半）までに減少した。そして、唐代における中国と中央アジアとの関係について、『中等東洋史』では「唐と中央亞細亞との関係大食の勃興と波斯の滅亡と」という章を設けて記述しているが（三ページ半）、『中等教育中学東洋史』では「唐代に於ける東西の交通」と題した章のなかの三項目（「突厥」「西突厥、波斯」「大食人の通商」、二ページ、挿絵なし）となり、『新制東洋歴史』では「波斯・大食」「大食人の通商」の二項目（一ページ半、写真、図画一枚ずつを含む）となり、最後の『中学東洋史』では、「この間に大食・インドなどの遠い国々も、また唐に朝貢した。大食とは唐の初にアラビヤのマホメットが興したサラセン国をいふ」と、わずか二行足らずの記述に短縮されている⁴⁶⁾。

総じていえば、一八九九年『初等東洋史』以降の桑原東洋史教科書において、『中等東洋史』に見られる「東洋」の地理空間はほぼ維持されているものの、紙幅の減少により、個々の歴史的事象に関する記述の中身が次第に貧弱になっていく傾向が見られる。

おわりに

これまでに見てきたように、明治期日本の中学校教育における「東洋史」教科は日清戦争後日本のアジア大陸への勢力膨張を背景に成立し、「西洋史」と並んで「世界史の一半」をなすという時代の要請のなかで生まれた。『中等東洋史』に端的に見られるように、桑原の東洋史教科書は時代の要請に応じて、次の二つの側面から「東洋」に関する新たな「知」を提供した。

第一に、王朝交替を中心とする中国の伝統的な歴史叙述、およびその影響を受けた江戸時代から明治二十年代前半期にかけての日本の中国史叙述と異なって、「東洋史」は中国史上中原の王朝と周辺の政権との関係、漢族と周辺諸民族との関係、さらには近代以降アジアを舞台とするヨーロッパとアジアとの対抗関係に着目し、民族／人種間の勢力消長に歴史の流れを把握しようとした。そこで、過去の時間は、中国の正史における王朝の一治一乱という循環的な捉え方ではなく、ヨーロッパの歴史叙述に倣って、上古、中古、近古、近代、現代の時系列のなかで直線的に捉えられている。

第二に、中国の中原地域を支配する諸王朝の歴史を中心とした従来の歴史叙述と異なって、「東洋史」における「東洋」の地理空間は、中国を中心とした東アジアから南アジア、さらには西アジアにまで広がった。この点に関しては『初等東洋史』を始めとする改訂版においてもほぼ変わらなかった。教科書における「東洋」の地理空間の広がり、中国の歴史を通じて歴史意識や世界認識を育む江戸時代の武家子弟の教育と異なる、日本の教育史における歴史観、世界観の教育の一大変革であったと言える。他面において、それは東アジアの歴史における中国の圧倒的な存在を相対化するものでもあった。これは、日清戦争後アジア大陸への勢力膨張を背景とする十九世紀末の日本の「東洋」に関する歴史知識と空間認識を知るうえで一つの興味深い素材であろう。

『中等東洋史』は教科書としての使用期間がわずか一年しかなかったが、著者桑原隲蔵の豊かな漢学の素養がもたらした中国史の知識、及びヨーロッパの書物に依拠した中央アジアなどの地域に関する知識を盛り込んだ優れた書物である。しかし、本稿第二節における『中等東洋史』と藤田豊八の『中等教育東洋史』などそれまでの東洋史教科書との比較が示したように、『中等東洋史』に盛り込まれた「東洋」に関する「知」は、決して

桑原隲蔵の独創ではなかった。『中等東洋史』はこれらの教科書の長所を吸収し発展させた書物というべきであろう。

ところで、『中等東洋史』の出版から『中学東洋史』の出版まで三十年もの歳月が隔たっている。この間、日本の中学校東洋史教育を取り巻く状況が大きく変化した。日露戦争以前から、一部の教育関係者の間で中学校の教科のなかから東洋史を削除することを求める動きがあった。その主な理由は、東洋史は固有名詞が多く、教師にとっては教えにくく、生徒にとっては覚えにくい、ということである。そして、東洋史を削除して、日本史を中心として東洋の歴史を付随的に説明するような意見まで現れた。これに対して、桑原隲蔵は、自らが編纂した教科書を含めて当時中学校で使われた東洋史教科書の内容を比較して、固有名詞を羅列したものは一つもないと主張している。また、桑原は、日本は東アジアの歴史において中心となったことは一度もなく、日本を中心に東洋史を構成することは「末に由って本を現そうとするので、労して効なきこと」と強く反論した⁴⁷⁾。このやりとりから、中国やその他のアジア諸国に対する蔑視感・優越感が増幅する当時日本の社会的風潮のなかで、中国の歴史に関する知識が大半を占める東洋史を学習する意欲が低下し、教育関係者の間でも東洋史を軽視する傾向が根強く存在していたことがうかがえる。

資料の制約により、桑原の東洋史教科書が中学校教育の現場でいつまで使われていたかは不明であるが、本稿で取り上げた『中学東洋史』が桑原の死後も再版されたことから、桑原の東洋史教科書は少なくとも一九三〇年代半ばころまでに使用されていたと見られる。戦時下における国家の教育統制が強まるなかで、一九四三年（昭和十八年）に発布された「中等学校令」において中等教育における教科書の国定制が定められた⁴⁸⁾。これによって、小学校の教科書が一九〇三年から国定制となったのに続いて、中学校、師範学校も文部省が編纂・発行した教科書を使用しなければならなくなった。

※本研究は平成二十一年度科学研究費助成金（基盤研究(C)）による研究成果の一部である。

注

- 1) 礪波護「桑原隲藏」、江上波夫編『東洋学の系譜』、大修館書店、1992年初版、1997年第3版、134-142頁。桑原武夫「桑原隲藏小伝」、『桑原武夫集』第七卷、岩波書店、1980年、434-441頁。
- 2) 礪波護・間野英二「宮崎市定」、礪波護・藤井讓治編『京大東洋学の百年』、京都大学学術出版会、2002年、239頁。
- 3) 宮崎市定「解説」、『桑原隲藏全集』第四卷、岩波書店、1968年、755頁、767頁。
- 4) 文部省の教授要綱には、①中国を中心とする東洋諸民族の盛衰興亡、②東西両洋の交通交渉、③日本と東洋諸国との関係、の三点が求められている（宮崎市定「解説」、前掲『桑原隲藏全集』第四卷、758頁）。
- 5) 江上波夫「藤田豊八」、江上波夫編『東洋学の系譜』第二集、平凡社、1994年、27頁。
- 6) これらの教科書のほかに、桑原は開成館編輯所が編纂した『新編東洋史教科書』（開成館、1899年）を校閲している。
- 7) 海後宗臣『歴史教育の歴史』、東京大学出版会、1969年初版、2000年第五刷、6-11頁。
- 8) 文部省編『史略』、1872年、海後宗臣編『日本教科書大系』近代編第十八巻、『歴史』（一）、195頁、講談社、1963年。
- 9) 桜井役『中学教育史稿』、臨川書店、1975年、121頁。
- 10) 同上、190-193頁。
- 11) 曾先之編・陳殷音積・王逢点校・西野古海正誤『十八史略』、東京：木村文三郎刊、1881年。
- 12) 岡千仞・坪井九馬三校閲、植田栄訳『須因頓氏万国史』、酒井清蔵発行、1886年。
- 13) 文部省編『学制八十年』、文部省刊行、1954年、130-132頁。
- 14) 桜井役、前掲『中学教育史稿』、221-223頁。
- 15) 奥田真丈監修『教科教育百年史』、建帛社、1985年、290頁。
- 16) 三宅米吉「文学博士那珂通世君伝」、故那珂博士功績記念会編『那珂通世遺書』、大日本図書、1915年、32頁。
- 17) 三宅米吉「文学博士那珂通世君伝」、故那珂博士功績記念会編『那珂通世遺書』、大日本図書、1915年、32-33頁。
- 18) 那珂通世「中等東洋史叙」、桑原隲藏『中等東洋史』、大日本図書、1898年。
- 19) 明治期における学問分野としての東洋史の成立については、五井直弘『近代日本と東洋史学』（青木書店、1976年）、礪波護「内藤湖南」、杉山正明・庄垣内正弘「羽田亨」、礪波護・間野英二「宮崎市定」（いずれも礪波護・藤

- 井讓治、前掲『京大東洋学の百年』所収)、永原慶二『二〇世紀日本の歴史学』(吉川弘文館、2003年)、中見立夫「日本的「東洋学」の形成と構図」(山本武利他編・岩波講座『「帝国」日本の学知』第三卷、岸本美緒編『東洋学の磁場』、岩波書店、2006年)を参照されたい。
- 20) 南塚信吾「日本における西洋史学と西欧中心主義の克服——明治期の『万国史』の教訓から」、『世界史研究所「ニューズレター」』第21号、2007年12月、4頁。
 - 21) 那珂通世『支那通史』、大日本図書、1888年、6頁。
 - 22) 宮崎市定「解説」、前掲『桑原隲藏全集』第四卷、755頁、763-764頁。
 - 23) 「中等東洋史弁言十則」、桑原隲藏、前掲『中等東洋史』。
 - 24) 江上波夫「藤田豊八」、江上波夫、前掲『東洋史の系譜』第二集、14-32頁。
 - 25) 森鹿三「桑原先生と藤田博士」、『桑原隲藏全集』別冊、「月報」六、岩波書店、1968年、9-10頁。
 - 26) 実藤恵秀『中国人日本留学史』、くろしお出版、1960年初版、1981年増補版第二刷、258頁。
 - 27) 桑原隲藏東洋史教科書の漢訳については、鈴木正弘「清末における「東洋史」教材の漢訳——桑原隲藏著述「東洋史」漢訳教材の考察」(『史学研究』第250号、広島史学研究会、2005年)がある。
 - 28) 藤田豊八『中等教科東洋小史』、文学社、1897年、1-2頁。
 - 29) 同上、2頁。
 - 30) 桑原隲藏、前掲『中等東洋史』、13-16頁。
 - 31) (清)魏源『海国図志』卷一「地球平圓全図」、「亜細亜図」、陳華他点校註釈、岳麓書社、1998年、2-3頁、10-11頁。
 - 32) 宮崎市定「解説」、前掲『桑原隲藏全集』第四卷、756頁。
 - 33) 窪寺紘一『東洋学史始——那珂通世とその時代』、平凡社、2009年、193-194頁。
 - 34) 児島献吉郎『東洋史綱』、八尾書店、1895年。
 - 35) 坪井九馬三「東洋歴史序」、坪井九馬三校閲、宮本正賢編『東洋歴史』上巻、富山房、1895年。坪井九馬三(1858-1936)、明治・大正期の歴史学者。ヨーロッパに留学し、主にドイツ風の史学理論を学んだ。帰国後東京帝国大学教授となり、西洋史を講ずる。桑原隲藏『中等東洋史』序文にある「予は坪井那珂両先生の講筵に侍せしを以て、直間接に其裨益を受たる所尠からず」という文言から、桑原隲藏が坪井九馬三の講義を受けたことが分かる。
 - 36) 藤田豊八『中等教科東洋小史』、文学社、1897年、1-2頁。
 - 37) 桑原隲藏、前掲『中等東洋史』、1頁。なお、この本の表紙には「高等師範学校教授・文科大学講師那珂通世校閲、大学院学生・文学士桑原隲藏編著」と記されている。

- 38) 桑原隲藏、前掲『中等東洋史』、1-11頁。
- 39) 宮崎市定「解説」、前掲『桑原隲藏全集』、755頁、760頁。
- 40) 「中学東洋史辨言」、桑原隲藏、前掲『中等東洋史』、4頁。
- 41) 那珂通世「中東東洋史叙」、『中等東洋史』、大日本図書、1898年。
- 42) 『中等教育東洋史教科書』は出版されてから二十年あまり日本の中学東洋史教科書を君臨した。その原因について、窪寺紘一は、桑原の『中等教育東洋史教科書』が広く流布したのは、同書と一緒に配布された懇切丁寧な教師用参考書が現場の教師から歓迎されたためであったと指摘している（窪寺紘一、前掲『東洋学事始——那珂通世とその時代』、205頁）。宮崎市定によれば、桑原隲藏の教師用参考書は、桑原が『中等教育東洋史教科書』出版後現場の教師から質問を募り、解説を施したもので、著者と読者との合作によるものであった（宮崎市定「解説」、前掲『桑原隲藏全集』第四巻、755頁、777-778頁）。
- 43) この教科書の初版が刊行された翌年、有高巖は桑原の遺族の依頼を受けて若干の修正を加えた（『中学東洋史』、東京開成館、1931年初版、1932年訂正再版序文）。
- 44) 1899年（明治三十二年）の実業学校令に基づいた農業学校規程と商業学校規程によれば、農業、商業学校はそれぞれ甲乙の二種に分かれている。農業学校の場合、甲種は修業年限三年、授業時間数は実習を除き週三十時間とし、乙種は修業年限三年以内、実習を除いた授業時間数は週二十七時間以内とする。商業学校の場合、甲種は修業年限三年、授業時間数は実習を除き週三十三時間とし、乙種は修業年限三年以内、実習を除いた授業時間数は週三十時間以内とする（「農業学校規程」「商業学校規程」（明治三十二年）、前掲『学制八十年史』、883-885頁）。
- 45) 1895年（明治二十八年）の高等女学校規程によれば、高等女学校の修業年限は六年であり、入学資格は修業年限四年の尋常小学校を卒業した者となっている。尋常中学校に比べて入学資格が二年低く、修業年限が二年長いのが特徴である。高等女学校の授業科目は修身・国語・外国語・歴史・地理・理科・家事・裁縫・習字・図画・音楽・体操とし、そのうち外国語・図画・音楽は自由選択科目である（文部省、前掲『学制八十年』、154-157頁）。
- 46) 前掲『中学東洋史』、44頁。
- 47) 桑原隲藏「教育管見」、前掲『桑原隲藏全集』第二巻、1905年、527頁。
- 48) 近代日本教育制度史料編纂会編『近代日本教育制度史料』第二巻、講談社、490頁。